
新信長伝 短気は損気

岩根 正和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新信長伝 短気は損気

【Nコード】

N0557M

【作者名】

岩根 正和

【あらすじ】

織田信長、天下統一目前でその夢が破れ、儂く散ってしまいました。

彼の早すぎた死、家臣団の謀反、それは信長が持っていた異常なまでの短気癩癩。

もし、彼が何かの原因で癩癩を抑える事が出来るようになれば何か違った歴史が始まっていたような気がします。

その癩癩の原因がひよんなきっかけで治ってしまいます。

そして、信長の天下統一は急速度で進んでいくのです。。。。

短気の原因

元龜元年（1570年）夏、信長のイライラは頂点に達し、諸將の前で癩癩を爆発させていた。

摂津、石山では三好軍が本願寺の援助を受け挙兵。

これに直ちに出陣し、現在軍議で新たな問題について報告を受けていた。

近江で朝倉、浅井軍が侵攻してきたのである。

織田信長という人は大層な癩癩持ちである。

その原因は極度の甘党からくる『虫歯』であった！

現代だからこそ歯科治療技術が確定されているが、当時とえば力任せに抜いたり、漢方薬を飲んだり詰めたりするぐらいであった。もっとひどければ祈祷師頼みと言う笑えない話もあったのである。。。

2

大変な事があると尚更痛みやがる！！

心の中で信長は叫びたい気持ちをもぐつと抑えて、諸將に下知を飛ばしていく。

一通り軍議を終え、退席する信長に小姓達がついてくる。

戦支度に急ぎ廊下を渡る信長……。

不意に磨かれた廊下に足を滑らせた信長が見事に『転んだ！！！！』

運悪く太刀持ちの小姓が持つ宗三左文字の柄にしこたま顎元を打ちつけた！

信長の口からは大出血、小姓は大慌てで医者を呼び血止めを行う。

血まみれの中には茶色に溶けかけている奥歯を始め数本の歯が落ちていた。

口の中を大いに切ってしまい、鉄の味を噛みしめながらじんじんした口内を意識しつつ縁起が悪い・・・と言つぶやく。

予感は当たり、戦線を支えていた近江の森可成と信長の実弟である織田信治が浅井勢に打ち取られたのである。

信長と言う人は一言で言うとな身内にとことん『甘い』そして甘党でもある、超がつくほどである。

そして信治は献身的に信長を支えてくれる可愛い弟であった。

一般的に、弟信行殺しで身内に容赦のないイメージのある信長であるが、世間で言われているほど信長は残酷ではないのである。

事実信長の一門で討たれているのは直接歯向ってきた者たちであるし、真に心服した者はことごとく許している。

しかも森可成という信長が最も目をかけていた重臣も討たれたのである。

この人は古くから信長に仕え、数々の戦をくぐりぬけてきた猛将であり、血筋は陸奥七郎義隆の流れをくむ源氏の名家でもある。

いつもなら怒りが頂点に達すると、『虫歯』の痛みが怒りをさらに掻き立てられ、冷静な判断が出来ない事も多々あった信長であるが、不思議にじんじんとした痛みがあるが、いつものズキンズキンと頭に響く痛みは無くなっていたのである。

「歯痛が治ったみゃ〜〜〜〜〜〜！！！！！！」
信長は叫んだ！

怒りと言う感情を冷静に受けいられる自分に驚きつつ、戦国一の合理主義者は自身の頭脳を高速回転させていくのである。

短気の原因（後書き）

というストーリーです。

たぶん虫歯という着眼点の仮想戦記は無いはず……！

無いですよね？ね？

包囲網の一角（前書き）

歯痛治りました！

包囲網の一角

取って返し、今度は近江へ急ぎ軍勢を進める信長。

織田信長の行動力は半端ではない、決断Ⅱ即実行なのである。

そして配下の家臣たちは戦々恐々としている。

理由は明白『信長は怒っている』からである。

信長の家臣団は、何よりもまず信長の感情を読めなければ勤まらないのである。

確かに重大事項であれば、即断で答えを出してくれる主人である信長であるが、瑣末な事など、一々伺いを立てられない事項などは癩癩を爆発される事が多々あったのである。

だが当人信長は日がたつにつれて冷静な考えが次々に溢れてくる。なんせ『齒が痛くない』のである。

信長の軍勢が近江に到着するや否や、浅井朝倉連合軍は比叡山延暦寺に逃げ込んだ。

信長の軍勢投入速度はまさしく戦国一であった為、浅井朝倉はあまりの早さに寺社勢力内に逃げ込んだのである。

当時の寺社勢力は、石山本願寺に代表されるように独自の兵力を擁し、兵農分離という面では、中世で一番最初に順兵士により構成された特異な戦闘集団である僧兵を多数抱えていた。

有名な所では戦国最強傭兵団を抱えていた『根来寺』などもあるが、もっともこの根来衆は信長と密接な関係にあり、今回の戦にも参加しているのである。

そういう寺社を敵に回すと厄介なのは、一向宗本願寺を相手にして

一番理解している信長である。

その信長は、延暦寺に対し通告を出した。

『浅井朝倉の軍勢を比叡山より退去せしめなければ山ごと焼き払う！』

これに比叡山は鷹を括った。

『出来っこない！』と・・・。

なぜなら座主である覚恕法親王は正親町天皇の弟なのであるからである。

しかし信長は冷静に己の状況を見つめ動く、先ずは朝廷に対し、現在の状況を上奏し、退去命令を時の正親町天皇より勅命を引き出したのである。

その命令に従わない場合は攻撃の大義名分を信長に与えるものであった。

こう着状態が続き、叡山より外に出るものは徹底的に殺され、外より中に入る事も敵わない状況である。

そんな折に突如信長より正親町天皇を通じ、和睦の条件が出されたのである。

- 1、現在織田家により支配している旧寺領の返却。
 - 2、比叡山の包囲を速やかに解く。
 - 3、浅井朝倉軍と和睦、これを追撃しない。
 - 4、純寺院としての天台宗を維持する事。
- 以上勅命である。

元々比叡山は信長の寺領押収により経済力を抑えられ、圧迫されていたのである。

寺領が返ってくるのであればなんの問題も無いのである。

浅井朝倉にしてもこのまま比叡山に籠るのはじり貧である。

こうして和睦は成立し、浅井への抑えとして横山城の木下秀吉に命じ南近江の抑えを命じたのである。

南近江は旧六角勢が勢力を残しており、非常に難しい地域でもあるが、木下秀吉の分断戦略で六角勢を裏より支援していた朝倉家よりの援助ルートを絶つことに成功している。

これにより六角勢は完全に成をひそめ、弱体化していくのである。また、織田家の税率にしても、年貢にしても破格の低条件、もしくは免税であり、織田家による支配を民衆が望むのであるから旧勢力は萎れていくばかりである。

そして岐阜から京までのルートを再び確保した信長は思いがけない行動を取るのである……。

包囲網の一角（後書き）

史実より勅命時期が早く内容も変わっています。
そろそろ歴史をいじりだします。

信長の変化

織田信長という男は、ある程度の知行を取る陪臣を直臣に取り立てて与力として付ける。

この方法は土地に愛着を持つ土豪達をサラリーマン化するのに成功する。

ひいては、兵農分離を進める上でも大いに役立つのである。

この方法の最大のメリットは時期を問わずに、何年でもいつでも銭の続く限り戦線に投入出来るのである。

織田軍の兵士はだから銭勘定に長けていて、自分の命の値段を知る。だから死にたくない、長生きして給料が欲しい。無理な戦いはしない。『尾張兵は弱兵』と言われる所以である。

しかし崩れても立て直し、局地戦で叩かれても又編成し突きかかってくる。これはある意味厄介な相手である。

そういう自軍の特徴を知っている信長である。

彼は中世世界史にも類を見ない物で、自軍の弱点を克服したのである。

それは『野戦陣地』であった。

野戦と言うのは、短期間で雌雄を決したり、自領に攻め込まれない為に迎撃するために発生する戦だが、今の信長の状況は重要拠点をつなぐ線を攻められなければ良かった。

凌いでいる間に各勢力を各個撃破すれば良い話であった。

現在信長に敵対する勢力で正に日干されている地域が存在した。

『比叡山延暦寺』である。

現在の信長は癩癩が収まっているが、弟と有能な重臣を殺された恨みは消えない。

その仇である浅井、朝倉軍に陣地を提供し、あまつさえ歯向つてきた寺社勢力比叡山をそのままには出来無いのは当然である。

当初信長は比叡山ごと丸焼きにするつもりだった。

しかし、家臣達がこれに猛反対するのである。

この当時当然科学が発達しておらず、すべての説明のつかない事は、神々によって起されていると思われていた時代である。

当の信長でさえ、戦勝祈願に神社に参拝したり、神頼みもするのであるが・・・（家臣に対するアピールで、自身はさらさら信じていなかった）

今までの信長であれば一気に怒りを爆発させ、狂気を身にまとい反対など口に出せなくさせるオーラがあつたが、信長は少し考え、反対派筆頭の右筆である武井夕庵に比叡山の武装解除を命じた。

これに、明智光秀、木下秀吉、佐久間盛政、池田恒興らを比叡山に遣わし、武装解除に成功したのである。

腐敗していた僧官らを処罰し、純粋な宗教勢力としての存続のみを認めた。

この時処断された僧侶、僧兵は約1000名であつたとされるが、宗教の名を借り、悪略非道な所業を繰り返してきた彼らに同情の声は少なかったとされる。

これは覚恕法座主に「仏法の法のみを持って、天台宗を治める」という宣言を引き出し、寺領も寺院、寺社以外を放棄した。

以後良僧達に支えられた天台宗総本山である比叡山純粋な宗教勢力

として、朝廷、信長の庇護のもと続いていくのである。

これにより『信長さまは変わられた』との声が諸将より聞こえられてくるのである。

信長の変化（後書き）

比叡山焼き討ちしませんでした。

史実でも、発掘調査などからごく一部の限定した攻撃だったので、
？との学説が主流になりつつありますね。

これにより他勢力よりなめられるかも知れませんが、身内の離反を
防ぐ事は期待できるかもです。

最大の敵

各個撃破の方針で信長は決して自分から不利な戦いを起こす事はしなかった。

信長と言う人は自分が不利なら平気で相手に頭を下げる事が出来る人であった。

しかし彼の最大のポリシーとでもいうべき、『宗教勢力は政治に関わるべからず』という信念は、当時一向宗と呼ばれ、各地で一揆を扇動していた『本願寺』との対決を決定的にさせていた。

当時の寺社勢力は朝廷、皇室、公家と密接な関係にあり、広大な寺領を擁し、一種の独立勢力として雄を誇っていた。

近畿圏の有力な寺社勢力は、本願寺、延暦寺、金剛峯寺、東大寺、根来寺などを合わせれば、実質収入は石高に直すと優に400万石を越していた。

であるから、信長という京の支配者にも強気な態度を取っていたし、三好家が全盛のころも決して機嫌を損なう事が出来なかったのである。

そして信長は柴田勝家、和田惟政を摂津に派遣し、三好軍の駆逐に乗り出す。

ここで信長最大の敵が決起したのである。

『石山本願寺』この一向宗の本山が蜂起した事により、伊勢長島、三河、越後など信長と誼を通じる勢力内で猛威を奮うのである。

しかし、浅井、朝倉勢を小谷城付近まで抑え込んでいた織田軍は、

摂津においても広大な野戦陣地を築いて、抑えに和田惟政、松永久秀ら畿内衆を残し、伊勢一向一揆平定に向かう。

この時、願証寺証意は下間頼旦らに命じ、数万に及ぶ一揆衆をもって長島で唯一信長側についていた長島城主の伊藤重晴を攻め落とし城を奪い、長島より織田勢力を一掃したのである。

ここで信長は、柴田勝家、滝川一益ら総勢7万の軍勢を率い、長島に侵攻する。

ここでも信長は補給路を絶ち、毎晩きらびやかな宴をひらいた。又戦闘捕虜達の武装だけを解き贅沢すぎるほどの食事、酒を取らせ解放している。

門徒衆は解放された門徒達を受け入れている内にたちまち兵糧が尽きていった。

織田軍が近隣の米食料を相場の倍の値段で買い取っていたため、門徒の中に横領するものが相次いだのである。

元々一向宗に帰依する者たちは、この時代の言わば最下層の人たちであり、念仏を唱えて死ぬと極楽浄土にいけるとの教えに沿って死に幸せを見出して戦闘するのである。

文字通り『死兵』を相手に戦う恐怖は想像に絶する。

しかし、彼らは見てしまった。

そして、一部の門徒は知ってしまったのである。

それは今まで見た事も無い音楽や、舞台、山海の御馳走、上等な酒。

今まで死ぬより酷い扱いを受けるのが当たり前だと思っていた織田勢は実は極楽からの使いなのでは？
と思う物も多数出てきた。

洗脳を解くには、それ以上の快楽を与えればよい。
そして、死に対して恐怖を与えればよい。

この時の信長の思考には見せしめで押さえるのではなく内部崩壊にて一気に制圧するプランが出来ていた。

「そろそろ頃合いだのん……。」

ここに信長は触れを出す。

『坊主、浪人衆の首を取ってくれば、長島にて田畑を与える』との触れである。

長島に蜂起した本願寺の坊官、浪人衆はあらかた門徒であった貧民達によって討たれたのである。

自分の土地が持て、地主になれる。

これこそが実は貧民層の切実な願いであったのかもしれない。

これにより約半年の時間で領内の一揆勢力を平定し、新たに20万石にも及ぶ願証寺寺領を手に入れたのである。

「このまま何も生まない土地よりは民草に与えて年貢をもらう方が
どれだけ得かだわ」

本願寺坊官たちは初めて敵対した『織田信長』を知り戦慄したのである。。。

策略家の扱い

織田信長を家臣達が語る上で、共通の認識は『急ぎ過ぎる』であった。

これは、信長自身の超現実主義も多分に作用したが、何より極度の甘いもの好きの信長の奥歯は虫歯に侵され歯の鈍痛、激痛に癩癩を爆発させる事が多々あった。

その癩癩が収まっている信長を忌々しく思い、その足を引つ張る事に情熱を傾ける人物が、京は二条城に居を構える『征夷代將軍足利義昭』である。

彼は代々の將軍達にたがわずに、時の実力者を利用した上で、その一番の実力者を葬る形で自身の権威を維持しようとしていたのである。

が、相手が悪かったとしか言いようが無い。

信長は自身のおかれている状況を激情に任せて動かなかったのである。

義昭とすれば、信長は怒りにまかせて抵抗寺社勢力である叡山に兵を繰り出し、せん滅させるものと読んでいた、その上で甲斐の武田信玄に大義名分を与え、信長を一気に葬り去ろうと考えていたのだが、叡山と信長はなんと和睦をした。

そして、信長は政治に介入せず、純粋な宗教活動に徹するなら存在活動を認め、庇護する姿勢を天下に示したのである。

義昭は焦りに焦っていた。
まさか長島の平定がこんな早く済んでしまうのも驚愕だったが、
何より頼りの勢力が浅井、朝倉、三好、本願寺のみになってしまっ
ていた事だった。

ここでも反信長連合にはころびが出てきたのである。

まずは、義昭の有力な家臣である荒木村重、細川藤孝が信長に臣下
の礼を取り、文字通り義昭を見限ったのである。

摂津より圧力をかけられる格好となった三好は松永久秀を頼り、河
内を放棄し信長に下った。

完璧に孤立する事になった本願寺はここで西国の雄毛利家に救援を
乞う。

いずれ、信長と雌雄を決する事は必死である毛利家は、本願寺に支
援を開始した。

その強大な海軍力を背景に、海路より大量の物資が石山に届けられ、
士気もあがり侮れない戦力を有した。

征夷代將軍、武家の棟梁であり最高の権威であるこの職についてい
るのは、織田信長により將軍職を受けれたと言っても過言ではない
足利義昭であるが、彼は己が政治差配が出来ない飾りだという状況
に耐えれなかったのである。

己が権威の象徴として平穏な生活を送る事が出来ないのは、將軍職
に野心をもつ者には無理な話なのかもしれない。

義昭は現在監禁状態と言ってもいい状態で二条城にて監視をされて
いる。

証拠にも無く、各大名に信長討伐を命じる書状を乱発しているのである。

それは親信長勢力である徳川家や北条家、上杉家にもである。

將軍直臣である細川、荒木両将もあまりに滑稽な義昭にほとほと愛想が尽きてしまったのである。

元龜2年11月信長は石山本願寺に対して改めて、石山退去、武装放棄を条件に和議の使いを出したが、毛利よりの支援で持ち返した本願寺はこの和議を蹴ってしまう。

かといって本願寺勢も織田勢が築いた広大な野戦陣地を攻略する事も出来ず、こう着状態が続いているのである。

浅井、朝倉滅亡

「猿め！やりおったわ！！」

信長はこの上なく上機嫌だった。

元龜2年12月横山城の木下秀吉が、浅井方の豪族である阿閉貞征、磯野員昌を調略し、織田家の配下に治めたのである。

これに先立ち朝倉家の重臣である前波吉継、富田長繁、戸田与次らが織田方に寝返っている。

織田軍は純粹な下士官を中心とした、いわゆる軍隊である。

当然動員をかけ雑兵を徴する事も出来るが、当時では珍しい、否、大勢力では織田家が唯一、1年を通し自由に兵を派遣する事が出来たのである。

農耕期などを気にせず何年も銭の続く限り兵力を投入出来るのである。

これに付きあった結果は見ての通り、朝倉、浅井はもうすでに領国経営が破たんしていたのであった。

信長は本願寺攻略軍団を残してほぼすべての兵力を動員したのである。

その数総数8万人の大軍勢である。

織田軍はとうとう自身の築いた野戦陣地を出て、北近江攻略を開始する。

浅井勢は小谷城に封じ込められ、救援に出れず、2万の軍勢を率いている朝倉勢は指をくわえて見ているしかなかったのである。

ここで浅井家がなぜ、信長を裏切ったのかについて言及したい。

金ヶ？の合戦の折り、信長はあえて浅井家に動員の陣触れを出さなかった。

というのも、浅井家が六角家との抗争の折り、朝倉家に多大な恩を受けているのも知っていたし、浅井の手前黙殺の確認だけを当主である長政とかわしていたのである。

しかし良くも悪くも旧体制の浅井家である。

所詮国人豪族の盟主にすぎない浅井家は、家臣達の意見を無下にできないのである。

前当主久政を強引に蟄居させた長政であるが、当然父も依然と影響力を持っており、これにかこつけて勢力を取り返そうと画策した。

信長を挟み撃ちにしようとする軍勢を差し向けたのは久政派の勢力だったのであるが、これを抑えられなかった己を恥じて、反織田の旗色を鮮明にし、そむいたのが現状である。

何せ信長自身が浅井謀反を長政の使者により報告を受けたので、心中察する物があったのであろうか、たびたび破格の条件で帰参を求めている。

だが、織田と戦うと息巻いていた重臣豪族がこぞって信長に下る姿

を長政は滑稽に思い見つめていたはずである。

ここで浅井長政の眼を疑う光景が展開された。

なんと、朝倉軍が撤退していくのである……。

「私は何のために義兄上に槍をむけたのか……。」
長政は絶句し、その頬からは一滴の涙がこぼれおちたのである。

この時父である久政は己の愚かさを思い知り、二通の書状をしたためた。

1通は織田信長に、そしてもう1通は息子長政にである。

その書状を近衆にことづけ、自身の腹を切ったのである。

介錯を添えない壮絶な切腹と伝え聞いた信長は、書状の内容を思い返し、「無駄な事を何故するのか……。」とつぶやいたという。

彼にはやはり合理的な事以外を理解する事が難しかったのである。ただ、冷静さを保つようになり、心のゆとりは出来ていた。

「朝倉軍を追撃し、根切りにいたせ!!!!」

ここに戦国史上もっとも凄惨な追撃戦が始まった。

そして一族の裏切りに会い、朝倉義景はあっけなくその一生を遂げる事になったのである。

時を同じくして浅井長政は父の自害、書状に目を通し覚悟を決めた。

木下秀吉に自身を含め信長の妹市を始め、浅井家の身柄を預けたのである。

これには信長は大いに喜んだ。

しかし、浅井家の名前を残すのは許さなかった、久政に今回の一連の責を負わせ、長政には織田の性を使わせた。

一門として遇する事により、浅井家の旧臣をゲリラ化させない為の措置である。

これにより、浅井、朝倉両家は戦国の時代より消え去るのである。

湖北を引き継ぐ者・・・（前書き）

浅井長政ですが、今回は浅井家は滅びましたが、長政は織田家の門衆として、浅井の血筋を守っていきます。

湖北を引き継ぐ者・・・

現在の織田家の状況をおさらいおこう。

淀川と大和川が合流し、その付近にある渡辺津は、淀川・大和川水系や瀬戸内海の水運、海運の拠点で、ここより毛利方から物資が運ばれている。

また住吉・堺や和泉・紀伊方面と京都や山陽方面をつなぐ陸上交通の要地でもある摂津石山の地、ここに現在織田家の最大の敵石山本願寺が広大な城郭を構えている。

それに対し、信長も佐久間盛政を主将とし、河内にくさびを打ち込み、野戦陣地を構築し攻略の機会をうかがっているが、毛利家からの莫大な援助物資、紀伊雑賀衆よりの援軍などによりほころびを見せずに悠々と構えているようにも見える。

現在新たに摂津方面を攻略しているのは、義昭を見切り、信長に臣従した荒木村重である。

大和方面は、松永久秀、筒井順慶が押さえている。

紀伊方面は複雑な国人衆、寺社勢力が入り組んでいて、有力な勢力が台頭していないが、強力な傭兵団を擁している雑賀衆は一向宗が多く、本願寺派、同じく傭兵団を擁する根来衆は信長派である。

柴田勝家は越前の朝倉旧領の統治を任される。

越前は加賀の隣に位置し、一向宗の勢力も根強いが、勝家の類まれな統治能力（猛将のイメージが強いが、領国経営の上手さは秀吉と

並んで織田家の両翼となる）により民の不平も生まれずに平定されていく。

丹羽長秀は、畿内の遊軍的な位置づけとして、南近江佐和山に置かれた。

滝川一益は、伊勢長島に東方警戒軍として置かれる事となった。

信長は一連の中で二人の有能さに目を付けたのである。

それは、明智光秀、木下秀吉である。

有能な男たちとは思っていたが、どうも桁が違う。

明智光秀は当たり前に与えた仕事以上の結果をもたらしてくる。

木下秀吉は大層苦労したと言いながらも毎回これも与えた以上の結果をもたらしてくる。

光秀は涼しい顔で「なに、当然の事……。」としらじらしくも澄ましてくる。

秀吉は大げさな表情で「いやあ！！どえりやあ大変でございましたが……。」と大げさに手柄を報告に来る。

どちらにしても有能であり、自身と同じで良く働く二人は後々まで重臣として、織田家の柱石になるのである。

そして、信長は恩賞として、光秀に志賀郡を与え、これを褒美としたのである。

さて、では今回の朝倉浅井討伐の一番手柄はというと、信長は湖北三郡12万石、浅井の旧領を秀吉に与えたのである。

常に前線に張り付き、浅井の湖東よりの南下を許さず、次々と有力な重臣、豪族を調略し、手薄になった味方の援軍にも参戦したこの男に最大の恩賞をもって報いたのである。

尚、この時信長は、秀吉の弟を直臣に取り立てたうえで、与力として改めて秀吉に付けたのである。

この頃より秀吉は家内で有力だった丹羽長秀と柴田勝家から一字ずつをもらい受け自身の性である木下から羽柴を名乗るのである。

この頃秀吉をもっとも可愛がっていた両将の顔を立てたのである。

(この頃勝家と秀吉の関係は悪いどころか、秀吉は親父殿と呼び、慕っているのである)

この時湖北に入植した秀吉は瞬く間に旧浅井家臣団を組み込んでしまふ。

彼と直接対峙し、彼の猛将振り、智将振りを目の当たりにしてきた彼らは利に聡い近江者らしく秀吉の出世に乗った、それに下手に反発などしたら、元主君である長政の進退にも係わってくるであろう。

一気に巨大化した家臣団の差配に関しては、弟である秀長が絶妙な調整能力をみせる。

彼が間に入って、まとまらない話がまったくないのである。

所領の民草達が争って、判断を仰いでも、名族出身の豪族の争いも、彼が間に入るとなぜかすんなり収まるのである。

秀吉は今浜の地を「長浜」と改め、長浜の地に築城を始め、関所を撤廃し、城下町に工商を呼び込んだ。

この時近江の国友村の職人たちも移住させ、一大鉄砲生産地として機能させていく。

湖北の地は羽柴秀吉によって新たに栄えていくのである……。

甲斐の虎

甲斐国躑躅ヶ崎館のトイレでその男は考えていた。

甲斐の虎、武田信玄である。

この男は大事な考え事や、書状などを見る時にトイレに籠る癖がある。

彼の最大の懸案事項は『織田信長』であった、彼は信長と言つ男を買っている。

いや、正直見事だと思う。

自身がもう少し京に近く、都の政変に巻き込まれにくい土地に居たならば天下も取れたであろう。

だが、時と場所は信玄に味方をしなかった。

義昭より届いていた過去の書状を思い返す……。

「信長非道なりて、比叡山を焼き討ちにするらしい、一刻も早く兵を率い上洛致すべし」

確かに信玄は信長が叡山を焼き討ちなどしようものなら一気に攻め込むつもりであった。

事実浅井、朝倉勢や、三好、本願寺などの勢力と連動して抑え込むつもりでもあった。

流石の信長もこれだけの勢力に抑え込まれば一気に攻め落とせると踏んでいた。

「見事・・・」
と改めてつぶやいた。

この頃の織田家と武田家は決して険悪な関係でもないのである。

と、いうより信長は西方を向いており、東方は正直徳川家、水野家に任せていた。

信長は決して不必要な敵を作らなかった、特に東方の強国である北条、上杉、武田には気味が悪いくらいへり付くらい多額の貢物を送っている。

あまりに弱腰な態度の織田家を見ている重臣達は『織田家などその気になれば一ひねりよ』との思いが蔓延するくらいである。

そんなこんなで気付いてみると織田家と、武田家では石高にして4倍、経済規模にすれば10倍近くの格差がついていた。

現在の強国達と共闘出来れば対抗出来ないでもないが、その強国同士で争っているのであるからどうしようもない。

そうこう考えているうちに信玄は激しくせき込む。

鮮血が口から飛び散る・・・。

『結核』である。

そのほかにも体のいたるところにがたがきているのを信玄自身が痛感している。

『人生50年』の時代である、自身も小僧とどこかで侮っていた信長とは13歳も年が違つ。

信玄の最大の武器である情報収集能力によると、家臣団も綺羅星のごとく国主クラスの實力を持つ柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益、明智光秀、そして、農民より大名に取り立てられたという羽柴秀吉などなど、集められた情報によりこれら織田家の重臣たちの特徴は政治、軍略、戦術、経済、戦闘どれもそつなくこなしていく者達との判断を信玄は下していた。

これらの家臣団、織田家の巨大化、自身の老い……。

そして信玄の心を曇らせる報告が舞い込んできた。

「北条相模守ご逝去!!!!!!」

相模の獅子北条氏康の最後を告げる報告である……。

甲斐の虎（後書き）

武田信玄は織田家に敵対するのは、比叡山の法主が亡命してきたからと言われています。

では、比叡山が存在している世界では攻め込む名目も存在しません。

じゃあ、敵は？と思われませんが、意外な強敵を考えています。

石山の守護神

本願寺勢には二人の守護神が居る。

「大坂之左右之大将」と言われた『下間頼廉』『鈴木重秀』である。

重秀は『雑賀孫一』という敬称でも通っていて、孫一は重秀だというものも居れば、いいや違うというものもいる。

これは半分正解で、半分ハズレである。

というのも、彼ら雑賀衆は傭兵稼業を生業にしており、いつ敵味方になるかも分からないうえに、武名をあげて、狙われるのはまっぴらごめんやという考えがあります。

そこで考えられたのが、組織の役職が「名前」という制度でした。

つまり、鈴木家の指揮官が雑賀孫一を名乗っていたのです。

狙撃手なら、「針」とか「蛭」とか通り名をあげればきりがない。

何せ、鈴木家の者は、本名で活動する時というのは商売である傭兵ではなくて、本気の戦の時である。

彼ら雑賀衆が当時世界でも最も鉄砲を有効に戦闘活用出来た集団だと言われています。

それは前込め式の火縄銃はどうしても次の発射までには時間がかかり、各個ばらばらな個人射撃になってしまいます。

弓にしろ、鉄砲にしろ、飛び道具の最も有効な使い方は、「制面射撃」である。

信長が考案したと言われる3段撃ちは後日有名な戦法として語られるが、雑賀衆が操る「組撃ち鉄砲」はそれを上回る恐ろしいシステムである。

鉄砲は1人で使用すると、熟練した鉄砲兵の射撃の間隔は早くても約20秒強と言われています。

信長はこれを三段に分けることにより、約7秒間で制面発射する事が出来た。

これに対し、組撃ち鉄砲は1挺の鉄砲を4人で撃つところに特徴がある。

すなわち、射撃手が一人いて、その左右と後ろに各1人ずつ配置し、それぞれが別々の役割を果たすのである。

銃に弾を込める係から、蓋に火薬を素早く盛って閉じる係、さらに後ろの兵が火縄を火挟みに挟む係と、分散されていて、あとは射撃手が引き金を引くだけである。

この一連の動作では、約4〜5秒間隔で連射できたという。

さらに射撃を2組に分けただけでも、計算上2〜3秒間隔の射撃となる。

相手の軍勢は荒れ狂う射撃の雨に近寄る事も出来ないのである。

これを指揮するのが、鈴木家一番の戦上手『鈴木重秀』なのである。

もう一人の大将『下間頼廉』である。

この人は本願寺の坊官であり、坊官とは門跡という格式に付随する職で、大名家でいえば、家老職と言ったところである。

頼廉はその坊官という職を与えられ、本願寺内部では家老として政務・軍務を取り仕切った。

さらに彼は清和源氏頼光流で、源三位頼政五世の孫宗重から始まるれっきとした『清和源氏』の流れをくむ源氏武士なのである。

その為軍政では頼廉を始め、多くの下間一族が本願寺の戦闘に参加していた。

彼もまた鉄砲の指揮を取らせると一級品であり、恐ろしい戦闘能力を擁していた。

この男の凄味は外交力・政治力にも発揮させられている。

日和見がちな毛利家を引きこんだのも彼の手腕であるし、門徒の一揆を扇動して、領国の大名を動かしたりもする。

三好家はこの典型であったが、彼らも信長に下り、阿波に引っ込んでしまった。

武田家もあと一息で引き込めたが、どうも参戦する気はないようであるし、上杉にいたっては越後国境で加賀門徒が扇動している影響もあって、信長以上に陰悪である。

北条家も、隠居とはいえ実質の権力者である氏康が無くなり、積極性に欠く。

頼廉は正直手詰まり感で一杯であった。

一揆を扇動するにも、織田家の領民は信長の政策を大歓迎している。噂を聞いて、隣国の領民などは逃げ込んでくる始末だが、信長は積極的に保護した。

信長は逃げてくる領民に対し、開拓地を与え、開拓した土地を与えた。

又余っている二男三男などは、兵役に雇い入れ、軍事力の拡大を図った。

情報封鎖のメリットなど信長に取ってはデメリット以外の何物でもない。

逆に織田政策の良さを外に広めるのは大歓迎だ。

現実に越前の領民などは、織田軍が侵攻したときに、あまりの協力的な領民たちに織田兵が面を食らったほどである。

民衆の不満に付け込んだ宗教洗脳は、現実的な生きる希望と生活を与えれば、自然と溶けてくる。

人は誰しも本能で生きたいのである。

只この時代は、生と死の距離が近すぎた。

それにより、死が身近な彼らは、死後位は極楽にいけると言う事で宗教にすぎるのである。

当然、本願寺の坊官たちはそんな彼らを利用する。

それが信長が武装宗教を嫌う理由である。

頼廉もそんな民衆の心理を巧みに利用して、本願寺門徒を急速に増やしている。

この時期、キリスト教も布教活動が盛んであった。

彼らは日本の軍事力に恐れをなして、他国では積極的に見せていた武力に頼らずに、純粹に布教を説いていた。

彼らも一向宗の教えと同じで、死後の極楽を説いていた点で共通するものがある。

只、信長はこの頃庇護していた宣教師たちと距離を取り始める。

国内の金の価値の低さに着目した南蛮人達が大量に海外に持ち出したのである。

さらに、人身売買を積極的に行っていた。

これがどうもカンに障っているらしい。

信長は珍しく、奴隷売買をしない大名であった。

あの信玄でも、謙信でも積極的に奴隷を売っていた時代である。

この人ほど、特権身分でありながら、身分に興味がない人間はいないと思われる。

下賤の出である秀吉を大名に取り立てたり。

気さくに天皇に接したり、町民と飲み会をしたり、支配される側の人間から見たら彼は誰よりも自分たちを支配してほしい人だったのである。

石山の守護神？

大阪石山の地では連日各地よりの報告や檄文が飛び交い慌ただしい毎日が続いている。

本願寺第十一世宗主、顕如は毎日頭を抱えながら過ごしている。

これもそれも信長の素早い柔軟な政策によって一番のよりどころ門徒衆の数が増えないのである。

顕如にとっては全く迷惑な話である。

保守社会では、寺社勢力はれっきとした支配階級の一つであり、宗教という思想を同じに志す者達が集まる事によって、勢力を高めていく。

信長が要求してきている石山退去などは到底のむ事の出来ない。正に死活問題なのである。

只、一揆を扇動し、信長の怒りを買っている事も十分に分かっているし、お互いに血を流しすぎた。

それに現在の状況を見ても決して負けていない。

利に聡い雑賀衆の中から最強と言われる鈴木重秀率いる鉄砲衆は、銭金関係なく、体を張って織田軍を各個駆逐していくし、自身の坊官である下間頼廉も決して負けない。

まさしく本願寺を落とすのはかなり困難な作業になる。

海運からの補給で、陸路の閉鎖が意味のない物になっているのであ

る。

毛利家よりの大量の物資は石山本願寺の抵抗力を間違はなく強化し、毛利家も又、本願寺よりの見返りなのか、領内の一揆の類は全く無くなっていた。

勿論織田家もこれを見過ごすはずも無く鳥羽水軍、九鬼嘉隆を総大将として、陣触れを出す。

しかし、水軍衆は毛利水軍、雑賀水軍の強さを理解していた。九鬼嘉隆は信長に直訴する。

「せめて同数の船を揃えるまでお待ちください、幾ら大安宅船とはいえ、このままでは戦闘は難しいでしょう」

信長は海の戦を知らない。

知らないゆえに、水軍の事は、水軍奉行達に任せていたが、海運を握り、外洋に面した城塞がどんなに恐ろしい要塞になるか、そちらの方が焦りが勝ってしまったのである。

「補給船を本願寺に入れなければいいだけだみや！」
勝たなくてもいいが、補給の妨害位は出来ると確信していたのである。

そして、大型の安宅船を中心とした九鬼水軍は、疾船を中心とする村上水軍の機動力、戦場兵器焙烙玉・雑賀衆の使用する焙烙火矢の前に、織田方の水軍は壊滅的な打撃を受けたのである。

又、真鍋七五三兵衛・沼野伝内・沼野伊賀・沼野大隈守・宮崎鎌大夫・宮崎鹿目介・尼崎の小畑氏・花隈の野口氏ら水軍頭たちと舟艇三百余艘を一気に失う大敗北を喫したのである。

敗北、正に殲滅の様子を信長は一点を見つめ震えている。

近衆は怒りで爆発するのではとおびえきっているが、小姓の一人は気付いていた、それは信長が涙を流しているのだと。

「すまにゃあ……。」

陸路よりも重秀、頼廉らが手勢を率い押しでは引き、引いては押す巧みな用兵術を駆使し、佐久間勢、和田勢、荒木勢を敗走させていく。

特に重秀本人は、馬上より短筒を撃つては併走者に渡し、次々と馬上で組撃ちをやつてのける。

当時、馬上より攻めかかるのは不利であったが、（槍衾をあげられると、馬は本能で止まってしまう）直接攻撃ではなく、間接攻撃なので、絶妙な間の取り方よつて一方的に攻撃を仕掛けていく。

重秀の有効射程距離は、火薬の性能の差もあつて、織田兵の鉄砲衆の射程距離の1・4倍もあつた。

そこに射撃手の腕もあり、織田軍の鉄砲火線は致命傷を与える事は出来ない。

しかし、明智勢に攻めかかる時に重秀の本能が危険を察した。

「えらい慣れた奴らがよおけおるみたいやな」

馬首を返した時に重秀の頬を銃弾が掠めて一筋の傷を負わせるのである。

「根来の津田おるやんけ、こりゃ一回下がらなあかん」

決して、雑賀衆が根来衆より劣っているわけではないが、自身に何かあれば、本願寺の戦力が半減してしまう事を自覚していた。

一方敵方で馬上より短筒を肩に担ぐ将を狙撃したのは根来衆、杉の坊勢を率いる『津田監物』である。

「あれ鈴木のいっちゃん上の重秀やろ、遠当て外してもたわ」
「かっかつかと小気味のいい笑い声をあげる監物であるが、彼ら紀州人達には彼らしか知らない密約があつた。」

『敵味方に分かれたら紀州人は殺さない』
複雑に国人、寺社勢力がからみつく紀州の民しか知らない内輪の協定であつた。

石山の守護神？（後書き）

関西の戦には紀州の傭兵を抜きには語れない・・・かな？

時の將軍である義昭は現状を苦々しく見守るしかなかった。

自身は現在二条城にて、實質監禁状態に置かれている。

いつそのこと三好や松永みたいに殺してくれたらどれだけ楽かとも思う。

しかし、信長という合理主義者は利用出来るものはなんでも利用する男であった。

將軍家を抑える事は、越後の上杉謙信を抑える事にもつながる。

上杉謙信という男は幕府、將軍家に恐ろしいほどに忠誠を持って動いている。

幕府の役職である関東管領という名誉職を管領上杉家の養子に入る事によって、その役職を継いだ彼は、直江津より入る莫大な経済収入を背景に関東緒將の乞われるまま援軍として出兵し、捕虜、国境の敵領に侵入し奴隷売買によっても莫大な利益をあげていた。

軍神ともてはやされてはいるが、彼の強みは5000から10,000位の軍勢を指揮しての戦術的強さであり、信長の様な戦略的な包括包囲戦などはやはり発想自体無かったのである。

しかし謙信を敵に回すメリットも信長にはないし、何より甲斐の武田信玄の何よりの抑止力になっている。

加賀、越中の一向一揆も越前司令官柴田勝家によって攻められ、加

賀より越後をうかがう余力も一向勢は無く、上杉家、織田家の利害も一致していた。

現在北条家は先代の死去により多少の混乱があったが、すでに代を譲られていた北条氏政は決して凡庸ではなく、着実に支配体制を固めていた。

それだけではない、氏康在命の頃は何かにつけ口出ししてきた父が亡くなった事により、自由な経済政策、軍事政策を取れた。

（余談ではあるが、武田家も、北条家も家を滅ぼしたのが偉大な先代を持つ息子達だが、彼らは過去最大の版図と繁栄を一時ではあるが築きあげている。只、自信過剰になり、周りが見えていなかったのは大いなる不幸であった。）

特に本拠地の相模湾を望む居城小田原城は、城下町をも城郭の中に取り込むほどの巨大な城塞都市であった。

ここを上杉謙信が、永禄四年、時の関東管領・上杉憲政を擁して、宇都宮広綱、佐竹義昭、小山秀綱、里見義弘、小田氏治、那須資胤、太田資正、三田綱秀、成田長泰ら上杉家家臣団を中心とする10万余の大軍で、小田原城をはじめとする諸城を包囲し、氏康を追い込むも結局武田家が信濃の支配権を固め牽制越後の背後を牽制し、関東東緒將の不和などにより撤退している。

これにより上杉家は北条家にじりじりと押されていくが、甲斐の武田が駿河の今川領に侵攻した事により、上杉と和睦するが、氏康死後、再び北条は武田と手を結ぶ。

もとより、上野、下野、常陸などの争いになった地域は、名門の国人達が多く、独立連合な物であった。こっちへ付き、こっちへ付きで、配下として組み込めない事情があった。

現在で言うと、連立政権のキャスティングボードを握り、政局を振り回す新党みたいな者である。

そんなやからではあるが、格式だけとると、甲斐の武田家は別として、成り上がりの後北条や長尾など彼らから見たら格下のくせにと思っ者も多かつたのである。

謙信にすれば、織田家が加賀を抑えてくれて、自身の越中攻略は非常にやりやすく、織田家との関係を崩すつもりはない。

では武田家はというと、こちらも織田家との争いは利が無いと信玄は攻略目標を謙信一本に絞っていた。

まだまだ駿河の支配権は確立しておらず不安定ではあるが、甲斐、信濃の運営は盤石であり、北条との同盟もある。

幸いにも信玄は本願寺勢力と不仲でない。

越中方面軍と、信濃方面軍により侵攻準備が整いかけた元亀四年、信濃善光寺に差し掛かったところで、武田信玄は体調を大きく崩した。

武田家動くの報を受けた謙信は、越中の攻略軍を河田長親に預け、自身は春日山に戻り、決戦兵力を率いて信濃川中島に進出した。

東国三國史？（前書き）

3回更新分間違って消してしまい、やる気が出ませんでした。が、気合を入れて更新です。

東国三國史？

善光寺平の南に位置する、犀川と千曲川の合流地点から広がる地を川中島と呼ぶ。

この付近で上杉家と武田家が信濃の覇権を争った戦が「川中島の合戦」と呼ばれている。

その川中島周辺についておさらいしておきたい。

信濃国北部にある千曲川の河川洲には善光寺平と呼ばれる肥沃な盆地が広がる。

この地には現在の長野善光寺があり、戸隠神社、小菅神社などあって有力な寺社勢力により形成されていた。

当時の川中島は、幾つかの小河川が流れる湿地帯と荒地が広がるものの、河川が運ぶ肥沃な土地は肥えて、米収穫高は当時の越後を上回っており、米の収穫が低い甲斐にある武田家は常にその地を憧れに近い欲望で狙っていたのである。

しかも、善光寺平は交通の要であり、守りやすく攻めやすい戦略の上でも大変有用な場所であった。

武田家にすれば、この地より、北信濃から越後国へ至る重要地点であり、上杉家にとっても千曲川にそって進めば上野・甲斐に通じる重要地点である。

当然この地の領有権の争いは激しい物になり、元龜4年の時点では北信濃の一部を除いて、武田家の支配下に治まり、一応の終息を見せていたが、武田家の支配統治は一流とはいえず、混乱は続いている。

彼は、当時の名門武士の棟梁には珍しい、他家の土地を奪ってしま
う、侵略欲を持っていた。

当時国人の盟主的な立場の守護大名も、自身の直轄地域などは有力
国人とさほど変わらない者であったが、いわゆる戦国大名と言われ
た大名達は、直轄領を有力国人達から吸い上げ力を拡大していつた
のである。

これは、当時戦と言えば反乱の鎮圧、盗賊の討伐、身内争いによる
戦しか知らない国人達には考えつかない感情であった。

信玄は信濃の侵略を始めた時、鬼畜ともいえる方法で諏訪家を滅ぼ
した。

それにより、信濃の豪族たちは悉く信玄と敵対する事になったばか
りか、相手に防衛の大義名分を与えてしまったばかりか、上杉謙信
まで引つ張り出してしまふ事になったのである。

信玄の侵略基本は、奪い、犯し、さらい、殺しである。

女は女衞に売り飛ばし、男は奴隷として売り飛ばし、老人にいたつ
ては皆殺しである。

当然新しい領主が領民に支持されるもなく、過酷な統治により恨み
を買っていく事になる。

これに比べ、後北条家の支配政治は実に見事である。

上杉家、武田家に比べ地味ではあるが、間違いなく実力は東国一で
あっただろう。

これは戦国期最低税率で領国を運営し、耕作地を広げ、相模湾から
の莫大な海運収入を得て、20年足らずで、みすばらしい小城であ
った小田原城を、総廓、天守を構える城塞都市につくりかえたので

ある。

そして北条家の良政を耳にする民衆は、北条家の統治を望む。彼らは支配地で奪うのは、領主、豪族の持っていた支配権であった。

それに引き換え、信玄は甲斐、信濃南部の一部でしか計算できる税収が無かった、民衆の一揆や、内乱に常に頭を痛めていた。

だから新しい土地を取り、名目上加増を家臣団に与えなければ軍団の維持が難しかったのである。

その答えが信濃の他勢力地帯を無くし、越後に圧力をかけ、信濃を完全に平定する事だった。

信玄は動いた。

上野方面より北条家が12000人、越中方面より武田別働隊として飯富昌景、内藤昌豊率いる8000人が侵攻、信玄本軍は海津城に陣を構え、16000人を率いて各軍の動きに合わせて越後、信濃境の飯山城をつかがっていた。

今回の信玄の作戦は3方面より信濃北部、越後西部より侵攻し、越後を脅かして、信濃北部を完全平定する事である。

又、北条家も上野の支配権を固めたい心理を、信玄は巧みに利用した。

まず戦端が開かれたのは越中である。

越中方面軍、飯富昌景、内藤昌豊率いる軍勢8000人が、一向宗と合流し、河田長親率いる上杉軍を潰しに走る。

長親は越中新川郡松倉城に4000人の兵を持って立てこもる。松倉城南1里ほどに着陣した武田勢は警戒体制のまま夜営に入る。そこを長親率いる200騎の騎馬部隊で奇襲をかけたのである。

「火を放て！狙うは荷駄一つ！」

長親は一目散に、陣地に積み上げられた荷駄を狙う。

「河田長親噂ほどではないみたいだな……。」

武田家四天王である内藤昌豊がつぶやく。

彼らは当然着陣日の夜襲を警戒していた。

明らかに今回の戦は別働隊の進軍速度にかかっているのは、敵味方問わず分かり切った事である。

定石であれば、城にこもり、通過しようとした軍を背後から襲う位の者であるが、敵将は上杉家で頭角を現している河田長親である。

きつと何か策を弄してくるはずであった。

「夜討ちが策かよ。」

半ば拍子抜けしたように同じく武田四天王である飯富昌景がカッカツカと小気味の良い笑い声をあげる。

「どれ、私が送り狼になり、一槍馳走いたそう。」

昌景が槍をしごき、愛馬である木曾産の黒鹿毛に飛び乗る。

武田勢が騎馬部隊400騎と足軽勢が退却する長親勢に向かって追撃態勢を整えた。

それを見ながら長親は城内に退却をする。

「良くひきつけるんやで！逃げ切ったらあかんで！」

武田勢は巧みな隊列を維持したまま、騎馬隊、足軽隊にて追いかける。

長親が松倉城に帰還し、カブキ門が閉まるかの所で武田軍に取り付

かれてしまう。

武田勢は城内に入り込み2番郭の矢倉門に取り付いた時、虎口の銃眼より鉄砲の制面射撃を受けてしまう。

そこに頭上より煮えたぎった粥がおとされる。

煮えたぎった粥は粘度が高く、甲冑、衣類、皮膚へと纏わりついて取れずに、重度の火傷を与えていく。

武田勢が混乱している所に容赦のない攻撃は続く。

忽ち攻め手のうち2000人程が戦闘不能になり、我先にと武田勢は陣地へと退却を急ぐ、一里先の陣地まで急いで走り込んでも少なくとも30分はかかる。

負傷した兵士たちは本能のまま逃げだしていく……。

長親はあえて負傷兵を打ち取らずに敵陣へと見逃した。

当時の日本の止血術は間違いなく世界一である。

刀傷医達の技術すさまじく、血止めに関しての外科技術は眼を見張るものがあつた。

それゆえに、本陣にたどり着いた負傷兵は治療を施され、一命を取り留めていく。

が、それは長親の恐ろしい計略でもあつた。

武田勢はなんと、手勢の4分の1に当たる戦闘不能者を、多数抱え込んでしまったのである。

東国三國史？

「東が揉めるとると助かるみゃあ」

信長はそう一人つぶやくと、本願寺対策に建造中の今までの日の本には無い妙な形の船を見上げながら、情報将校から武田家、北条家と上杉家の合戦の仔細報告を受けていた。

それによると……。

謙信の野戦での強さを身でもって知る信玄は、謙信の挑発的ともとれる不利な状態での大物見に対しても静観を決めていた。

なに、謙信本軍をここに釘付けにすれば、越中、上野方面より侵攻されれば、引かざるを得なくなる、そこを悠々と平らげるつもりである。

北条勢も上杉勢の拠点である倉内城（沼田城）を囲み上杉景信、上条政繁といった上杉勢の将と対峙をしていた。

利根川と、支流の蓮根川、片品川が合流する断崖絶壁の上に築かれた倉内城は天然の要害を利用した堅城であり、北条勢も攻めあぐねていた。

この度の戦何かが腑に落ちない。

武田家の緒将らもそう感じているが、それが何かが分からない……。

いつも通り、綿密な計画、諜報活動……。

それでも何かが引っかかる。

それは、長年の宿敵である上杉家が相手であるからなのか。

武田家信濃先方衆、真田家の先代隠居である真田幸隆は今回の戦について、只、危うい』と感じていた。

幸隆の知る信玄は慎重すぎるほど慎重であり、決して他者の力はあてにせず、思い通りにいけば儲け位の人を食った軍の運用をしてきた。

この度の戦略構想は、あまりにも北条に期待が過ぎるのではないかと悪く言えば人任せに写ってしまう。

『何を御屋形様は何をいそいどるんじゃ……。』
幸隆は武田一と言われる智謀を頭の中で巡らせたが、どの考えも一つの答えに行きつくのであった。

川中島で陣を張る武田信玄に耳を疑う報告が飛び込んできた。

『飯富昌景、内藤昌豊率いる別働隊総崩れ！！！！北条家も囲みを解き相模へ撤退！！！！』

「馬鹿なつ！！！！！！！！」

信玄は絶叫し、その場で卒倒した。。。

戦国時代を彩る英雄が散ったのである。

遺言として、信勝が元服するまでは勝頼を陣代にと一言だけを言い残し、信玄は52年の生涯を閉じる事となった。

そして上杉謙信率いる軍勢は、抑えの兵を残して察するようにならなから姿を消したのである。

その武田家であるが、武田勝頼は己が陣代という地位に就いたが、忌々しい思いにも駆られていた。

あくまでも陣代は陣代であり、信勝は己の嫡男といえども、武田の正当な継承者として扱われていた。

これは、諏訪家残党懐柔の為に、勝頼がこの名跡を継ぎ、諏訪氏の通字である「頼」を名乗り諏訪四郎勝頼となった事と決して無関係ではない。

なぜなら、信玄は何を思ったのか、これ以上ない残酷な方法で滅ぼした諏訪家当主、諏訪頼重の娘・諏訪御料人側室に迎え、子を産ました。それが四朗勝頼である。

諏訪の残党を抑えるのにはこれ以上ない人物である。

信玄は自身の稚拙な侵攻統治の犠牲に自身の子供たちを養子に出すしか道はなかったのである。

信長も、信雄、信孝を伊勢の名門、神戸、北畠家に養子を出すが、これはあくまで主家を傘下に治めるためで、当主の命までは奪っていないのである。

信玄は敵対する者を殺しすぎた。

後に諏訪の呪いと呼ばれる武田家の命運はこの時に決まったと言っても過言ではないであろう。

「これで東は家康に任せて、叩けるわ」

信長の前にそびえる船は、今までの和舟と違い、竜骨を持つ構造をしており、南蛮人達の船にも似ているが、少なくとも大きさに至っ

ては倍以上あると思われる。

この船をつくるにあたって、信長は色んな人達より意見を求めた。それにより確信した事がある。『燃えなければいい』相手の火器を受け付けられない船をつくる事であった。

そうして薄い金属板でおおわれた船は、秀吉に命じて国友鍛冶に作らせた『国崩し』と名付けられた大筒を両弦に備え付けられ、装甲された無数の銃眼が作られていた当時世界に類の無い装甲船として建造された。

竜骨構造を取り入れた事により、高い走破性を持ち、外洋にも耐えられる日の本唯一の艦隊を作り上げようとしている。

信長は自身の命令によって水軍衆を死地に追いやった事を悔やんでも悔やみきれなかった。

その戦闘艦達に彼らの思いを込めて見つめていたのである……。

東国三國史？（後書き）

信玄逝去しました。

彼に北条家並みの統治能力があれば、恐らくは武田家の滅亡は無かつたように思えます。

何せ、侵略政策が酷すぎました。

奪う、犯す、殺す、焼き尽くす。

北条家も、織田家も領民に甘い為には諜報活動をされやすい欠点もありましたが、当時の他勢力もその町の栄える姿を見て逆に戦意を無くさせる事もあったともいわれています。

異質なる船

謙信は春日山城へ引き返す道中で、これからの事に案じていた。

相模には北条氏康が居て、甲斐には武田信玄がいて、越後には自分がいて、この三雄によりバランスがとられ、旨い具合に地方勢力を組み込みながら戦っていた。

信玄は他領への欲望を隠そうとはせずに、援軍を求められるままに信玄と戦っていたら、知らぬ間に信濃の国人達である高梨家や村上家といった名門達が家臣団に入っていた。

氏康率いる北条家は一門衆の結束の強さ、内政統治の巧みさと、近隣の領民を難民化させ、自領にて受け入れて、相手の国力を低下させじつくり境界線を広げてきた。

それら同世代の英雄の死を相次いで接したことで、自身にも確実に訪れるであろう『死』を意識せざるを得なくなった。

人間とは何かきっかけがなければ自分に不幸が訪れる事など実感がわからないのである。

謙信の中での正義とは、あくまでも幕府という武家の棟梁が頂上に居て、日の本を束ね、臣下達は、反幕府勢力を征伐していくのが当然であった。

自分の中では国というのは、越後であり、全国の国主達に官位や役職と言った権威で動かしていく『將軍』こそが天下人であるはずである。

しかし、周りを見渡してみると、北条家、武田家、毛利家、織田家に至っては將軍家の支配力なんかを遥かに凌駕した勢力に成長していて、日の本よりもお家の事を第一に考える有様である。

謙信には理解が出来なかった。

なぜそこまで人の者を奪ってまで国を大きくしたいのかと……。自身に血を分けた子がいない謙信には到底理解が出来なかったのである。

信玄にしる、氏康にしる、後世の子孫のために家を盤石にしたいという気持ちを謙信は理解できなかったのである。

謙信にも後継者と言うべき青年が二人控えている。

一人は自身の姉、仙桃院と上田莊坂戸城主で長尾政景の二男であり、現在は謙信の養子である上杉景勝。

もう一人は北条氏康の七男であり、謙信の姉、仙桃院の長女と結婚し、これもまた、謙信の養子に入った上杉景虎である。

謙信はこの二人に長尾上杉家を相続させるつもりで、互いに競い合わせていた。

実際この二人は互いにライバル心を見せながらも仲良く、能力も申し分ない、謙信はどちらに家督を譲るかを正式に決めなくてはいけない時期に来ている事を、幾度も戦いを繰り広げた敵将の死で悟ったのである。

信長はその頃、出来上がりを迎えた戦鬪艦に乗り込み、今までの和

舟の走波性とは格段の違いを、海の素人である信長にもはつきりと感じられた。

約2000トンにも及ぶ巨大な船体には4本のマストがそびえ立ち、見た目は当時スペインなどで外洋に使われたキャラック船を発展させた形になっていた。

具体的には薄い鉄板にて装甲している為に船体安定を優先させている為に、全長と幅の対比が2.5対1と、随分ずんぐりむっくりではあるが、その分転覆の恐れは少なかった。

船幅がひろくなった分速度は遅くなったが、元来ガレー船主体の和舟の速度に比べれば随分船足は速く、万が一の為に櫂でも走行出来たのである。

砲台も備え、幅の広い船首を生かし、前面砲台、後方砲台、側面砲台と攻撃面に死角はなく、大砲の周りを薄い鉄板にて囲み、鉄砲の弾、矢などから砲手を守る防御方法として新しく採用された。

先の海戦で、信長が受けた衝撃は計り知れなく、さらに海軍衆の補充は大変難しい事を知った信長は、今まで以上に死を受け入れるのを嫌がったのである。

鉄砲で撃たれるのなら、撃たれても大丈夫な方策を考える。

燃やされるのなら、燃やされても大丈夫な方策を考える。

これを家臣の意見も参考にしながらも、独自の発想により、キャラック船の本家であるスペインにも無い発展型の装甲戦艦を世界で初めて作ったのである。

これを率いるのは、織田水軍衆筆頭九鬼嘉隆のだが、彼は今回の信長の執念やまったく新しい船の建造、それを執行できる職人集団、経済力に改めて驚愕し、信長の見ている先を感じ取ったのである。

「信長様にああ、日の本は狭いんであろうよ」

嘉隆は伊勢より大阪に向けて船を走らせていく……。

今回7隻に付けられた船の名前は『尾張』 『伊勢』 『美濃』 『近江』 『大和』 『越前』 『若狭』 これは現在、信長の経済支配国の名前である。

反勢力への圧力（前書き）

仕事忙しく更新止まってました。

反勢力への圧力

大阪湾の制海権を本願寺勢に握られていた織田軍は、海上からの輸送に只指をくわえて見ているしかなかった。

現在陸上における敵方の物流は完全にストップしている。

しかし、遥かに大量の物資を運搬できる海上輸送は、先に起きた、海戦の大敗によりなされるがままの状況である。

信長は恐るべき経済力を背景に7隻の戦艦からなる大艦隊を組織したのである。

この戦艦は幅の広い船首を生かし、前面砲台、後方砲台、側面砲台と攻撃面に死角はなく、大砲の周りを薄い鉄板にて囲み、鉄砲の弾、矢などから砲手を守る防御方法として新しく採用され、約2000トンにも及ぶ巨大な船体には4本のマストがそびえ立ち、見た目は当時スペインなどで外洋に使われたキャラク船を発展させた形になっていた。

正に巨大な動く海上要塞である。

但し、その重装甲の為、船体重量がトップヘビーになり、復元性には弱点を抱えているが、当時竜骨を持たない和舟などに比べれば遙かに走破性も高く、何より巨大であった。

それに対し、数隻の指揮用安宅船と多くの関船、早船からなる毛利

水軍は益々その威容を誇り、織田水軍なぞ大した事なしとの風潮さえ流れていた。

しかし、この時の政治状況は、織田領の東側は各国が争いに明け暮れ、さらに時の將軍である義昭が軟禁状態に置かれるにあたって、反織田勢力は連動が取れなくなっている。

各大家、寺社勢力にあつては、武家の棟梁である征夷代將軍の下でなら、汚れ役もやるし、損も被るが、裏を返せば、各自勢力拡大に明け暮れた戦国大名達なのである。

信長は1人の將に中国地方の攻略を命じる。

中国方面軍司令官に羽柴秀吉を任命したのである。

それに伴い、秀吉に筑前守の官位を宣下させた。
しかも信長が直接上奏してのことである。

これは画期的な事で、武家が官位を正式に宣下されるには征夷代將軍を通して宣下されるのがしきりであったが、信長自身も朝廷より直接、権大納言、右近衛大将兼任を命じられた。
命じられたというより、脅し取ったと言っても過言ではない。

当時の武家達には、天下様とは將軍の事であり、將軍が天下の象徴とみていた。

しかし、実際に官位を宣下するのは朝廷であり、帝なのである。

この事をきちんと理解している大名は実は当時いてないと言っても

過言ではなかった。

あの上杉謙信でさえも、武田信玄でさえもである。

信長は、意のままに操れない義昭をそのままにし、それよりも位の高い官位につく事によって、義昭の精神的よりどころである「征夷大將軍」を無実化してしまったのである。

征夷大將軍という官位、実は朝廷の中では高い官位ではないのである。

その事は教養がある人間ほどよくわかる。

当の義昭などは恐れおののいた。

「近衛大将」というのは、武家の最高官位であり、將軍と言われている官位よりはるかに格の高い物なのであった。

事実、足利家においても最高の栄華を誇った義満ら数人しか宣下されていなかったのである。

それと共に従三位の位も頂き、昇殿する権利も得る事が出来たのである。

それは、將軍の専売特許である帝と対面出来る榮譽をも信長は得たのであった。

これに伴い、己の重臣に名乗り官位ではない、本物の官位を宣下させていく。

各地の戦国大名なんかより格の高い官位をあたえていくのである。

例えば秀吉が宣下された「筑前守」これでさえ直近の宣下者は実質の天下人であった三好長慶が名乗りを受けている格式の高い官位である。

ちなみに、従五位下修理亮に柴田勝家、日向守に明智光秀、左近将監に滝川一益、を合わせて織田4天王とされる。

こうして信長は、自身の権威を諸侯に見せつけた。

『まずいなあ・・・』

毛利家では動揺が広がりつつあった。

なにせ、中国の覇者大毛利といえども、背後の大友家にも対処せねばならず、本願寺への大量の援助、これに山陰、山陽の抑えに動員をかけなければならぬのである。

毛利の援軍が望めないのであれば、それはそのまま己への刃となり返ってくる事など火を見るより明らかな戦国の常識である。

しかし、時勢は毛利には味方をしなかった。

早々と別所家と波多野家が秀吉に、織田家恭順を示したのである。

信長は短気であるし、頭の回転も恐ろしく速い、であるから、結果が分かり切った事に対して、女々しく抵抗してからの投降や、手間をかけさせられる行為を非常に嫌った。

その反面、時勢を読んで早くから協力をしてくる者達は快く受け入れた。

例えば、松永久秀などはこの典型である。

彼は信長が上洛するなり、主家である三好家を見限って、早々に信長に恭順し、大和切り取り自由のお墨付きを取り付けた。

しかし、名族である両家の当主にそんな芸当は出来ない。

今回彼らを秀吉に渡りを付けたのが、後に秀吉の与力として活躍する『小寺孝高』である。

その頃、織田水軍は紀州田辺を過ぎ、いよいよ大阪湾へ侵入準備を開始したのである……。

新次元の海戦

織田水軍が再び大阪湾に向かって進軍中。

この報は、雑賀衆を通じて石山本願寺、中国地方の覇者である毛利家にも当然届けられた。

その内容に奇怪な情報が添えてある。

『いかなる南蛮の船より巨大にて候』

船は大きければいい物ではない。

その証拠に、先の海戦では大型安宅船を主力とした織田水軍はほぼ全滅の憂き目にあっているのであるから、毛利水軍にとってはどれだけの巨船なのか？との興味を持つくらいであった。

関船、早舟にて主力をそろえる毛利水軍は強力な『焙烙火矢』にて相手の船団を焼き討ちするのである。

彼らは、信長が建造させた戦艦7隻が鉄板にて装甲し、強力な火器にて武装しているなど想像できなかった。

本願寺では、最高戦闘担当官というべき、下間頼廉が不安な面持ちで鈴木重秀と何やら密談を重ねていた。

というのも、信長が朝廷と直接繋がりを持ち、將軍の権威を無力化している事を彼は恐ろしい思いで大阪より見つめていた。

「元号が信長により元龜から改められ天正になり、あれよあれよという間に殿上人じゃ、このままでは勅命、勅令思いのままや。」

意外に当時は天皇の役割を正常に認識できているのは、畿内の公家、名族位のもので、田舎大名の最高権威者はあくまでも『将軍』なのである。

宗教勢力は、否応なしに朝廷と関わらずにはいられない。それは僧侶にも官位があり、朝廷より下賜される官位というのは何よりの箔であった。

朝廷と織田家が直接つながる・・・どれほどの強力な政治的圧力なのかは、政変著しい畿内の名族達は背中が凍る思いで傍観する事になる。

そして直接的な圧力は、毛利水軍と織田水軍との戦いにおいて、石山本願寺の命運は決定づけられたのである。

この戦を指揮するのは織田家水軍衆筆頭である九鬼嘉隆、その目付で自身の妹婿である織田長政と滝川一益が乗り込んでいる。

彼は実際に水軍のイロハを織田水軍衆、母国を捨て、日本に土着した南蛮人達により叩きこまれた。

先の海戦で、織田方の有力な提督達が一斉に戦死したためである。又信長自身、海に囲まれた日の本が生きるには海軍、海運が必要だというのは痛いほど痛感している。

それに伴って、織田家の有力な部将達は、その激務を縫って水軍術を習っている。

信長はすでに次の時代の布石を打ち始めているのである。

その織田水軍を迎え撃つ、毛利水軍総数700隻を誇る。

安宅船を指揮船とし、関船、早船が規律良く進む様はそれが今から戦に向かうなど忘れてしまいそうな感傷に駆られる。

それ以前に、この艦隊に挑みに来るであろう織田水軍が哀れにも思えた。

この戦が始まるまでは……。

旗艦である『尾張』を筆頭に、『伊勢』『美濃』『近江』『大和』『越前』『若狭』が縦列体形で大阪湾に突入した。

遠くマストより毛利水軍を確認するなり、各艦は帆を揚げた。

当時、和船は櫂により漕いで推進力を得ていたが、織田水軍の戦艦達は、複合マストにより推進力を得ていて、その速度差は波の少ない内海でも、何と時速に直すと20キロも違うのである。

その速度差に、毛利水軍の将である村上武吉は、心の中で『負ける』と本能的に悟った。

織田水軍はその速度差を生かし、毛利水軍をぐるりと囲むように縦列隊形で一方的に砲撃を始めた。

近づく小舟には銃眼より無数の鉄砲玉が降り注ぐ。やっとの思いで近づき、渾身の一撃をと、焙烙火矢で攻撃するが、その巨船は攻撃事態を無効化してしまうのである。

毛利水軍は文字通り、潰走を始めた、が、織田水軍がそれを逃がさない。

早舟には、火矢、鉄砲が矢板の遙か上から降り注ぎ、防御にならない、関船以上の中型、大型艦には容赦のない大筒の砲弾が降り注いだ。

織田水軍がちょうど毛利水軍を一周するように回頭し終わると、威容を誇っていた毛利水軍は跡形もなく海の藻屑となって消えうせたのである。

速度、装甲、火力、この三位一体の艦隊は恐らく当時世界最強の艦隊だと言えた。

本願寺の苦悩

織田水軍と毛利水軍の2回目の海戦は、織田水軍の圧勝により幕を閉じた。

生き残った毛利水軍の将兵達も、織田軍に投降し、捕縛された。

これにより、本願寺の封鎖作戦は、陸上、海上ともに完成し、あまつさえ海上の戦艦達は本願寺に対して艦砲射撃を始めたのであった。

これは実害もさることながら、心理的圧迫もすさまじく、寺内では発狂者が相次いで出る始末であった。

しかし信長は徹底的にこの石山にある、もはや寺というより大城塞と言っている石山本願寺を破壊しようとはしない。

信長の頭には、この石山の地に大きな商業城塞都市を建設するつもりである。

出来れば無傷で手に入れたい。

何せ、石山本願寺が織田家と決定的な衝突のきっかけとなったのも、信長が本願寺に立ち退き要求を突き付けたからであった。

本願寺勢にとって、この石山の地を離れるのは屈辱的であり、それを受け入れなければならぬほど脆弱でもなかった。

否、むしろ戦国最大クラスの動員数を誇っていた。

信者＝兵士であり、各地の一向宗を扇動して徹底的に対抗したのである。

その最大規模が加賀一向一揆、伊勢一向一揆であったが、これらも織田軍の飴とも言える領民への善政により、民衆達がそれを壊す勢力をむしる悪とみているのである。

自由に商売が出来、寺社の許可がなくてもなんでも売れる。

自分の田畑を持ち、夢も膨らむ。

正に戦国期において、唯一の上げ潮政策である。

人の噂なんかはなぜか封鎖された所にも入り込む。

『織田領の民衆達は一揆なんか起さないらしいで、そんな暇あるなら商売、農業に性を出すらしいで』

彼ら門徒衆はもともと信仰心の厚さもあるが、元来食い扶持に困り、貧困にあえぐ者たちであった。

それらを莫大な寺社収入によつて、食事だけ与え、兵士として使っている。

信長が言うところの『純宗教勢力』ではすでになかった。

この頃の信長は、純粹な宗教団体としての比叡山を積極的に庇護し、浄土宗から天台宗に改宗を積極的に進める。

念仏を唱えて、都合のいい宗敵と戦い、死んでも極楽に行けるなんていう法義なんて、イカサマ以外の何物でもない。信長は激しく本願寺勢に憎悪を抱く。

門主顕如はこの事態に頭を抱えていた。

というのも、彼ら門徒の僧侶は妻帯を認めていて、必然的にその子孫達が後を継いでいく。

そういう点も、彼らは大名達となんら変わる事が無かった。

そんな中、自身の後継者であり、本願寺の貴公子でもある教如が主

戦派の筆頭として、門徒達に激を飛ばしているのである。

そんな動きをしり目に、顕如は危機感を募らせていく、このまますり潰されれば本願寺そのものが消滅しかねない。

信長という恐ろしい男を敵に回して、改めてその思いは強くなる。

「そもそも敵に回したらあかんかった・・・。」

彼は、戦闘指揮官である下間頼廉にそう漏らした。

「しかし、やらんことには分からん奴らが多すぎますな、実際はまだやれるとおもつとる坊官もおおいです。」

頼廉は戦闘指揮者である。

勿論戦術単位での戦なら織田家に一步も引かないし、打ち破る自信もある。

しかし、すでに織田家という組織は、戦略単位での戦を始めている。

つまり、いくら戦術戦闘で勝利を重ねても、大局で押しつぶされる。

それが分かる人間がいないのである。

そんな折、朝廷よりの使者が石山本願寺に到着したのである。

朝廷よりの使者（前書き）

久しぶりの更新です。

自身の結婚の準備でバタバタし、やっとPC環境整いました！

朝廷よりの使者

『尾張』 『伊勢』 『美濃』 『近江』 『大和』 『越前』 『若狭』 これらは織田水軍の戦艦であり、当時の世界を見回してもこれらの船を打ち破る艦船はあるのか？

これらの戦艦より連日連夜砲撃が止む事はない。連射により疲労した大筒は次々に新しい大筒に変えられ、その豊富な補給態勢を寺内の人々に見せつけている。

当然夜間に決死の小船を出し、何かしらの損害を与えに行こうとするが、周りを囲む無数の早舟に囲まれ、海の藻屑となっていく。船上では華やかな酒宴が行われており、補給を止められた本願寺の兵と民らが羨ましそくに船上へ視線を向けている。

現在これらの艦隊に海上を抑えられている本願寺の交戦派僧兵たちも実際に突き付けられている現実の認識を持ち始めた。

いつの時代も戦争行為は女子供が犠牲になる。心理的圧迫に耐えかねず発狂する物が続出しているのである。

死ねば極楽にいける！しかし極楽の様な華やかな船から放たれる焼けた鉛の塊は親しい者たちの命を奪っていく。

もがき苦しみもだえる姿は、極楽に行く者の姿にはとても思えない。

当時の日本では、宗教勢力はれっきとした武装集団であり、広大な寺領を持つ支配者なのである。

その現実には、戦乱に常に巻き込まれ、貧困に苦しむ民の盲目を利用した政治手段であり、商業手段を行使するための武力なのである。

信長はその合理的頭脳から、これらの理不尽な現実を激しく憎悪した。

宗教は宗教のみに力を入れ、公家は天皇を補佐し、官位権威の象徴になればいい。

武家は世の中から争いを無くし、民の暮らしを守り、よき政治を敷けばよい。

信長の理想は、当時の人たちの非常識であるが、なぜか心が引かれる理想である。

信長自身戦闘行為は自身の理想をかなえるための手段の一手に過ぎない。

彼が決して戦闘では強くなく、政治力、経済力、軍事力この3体を有効に使い相手を封殺していく、これこそが信長のやり方であり、強みである。

その封殺にもがいている信長の中の『憎悪の象徴』である門主顕如は朝廷より遣わされた使者より告げられる厳しい条件に絶句していた。

石山より退去、これは当然のごとく顕如自身も覚悟をしていた。もちろん武装も解除されるであろう。

しかし、信長が要求してきた中に苛烈な文面があるのである。

『教如筆頭に抗戦派死罪』

信長の怒り

信長は最大の強敵であった本願寺に関しては非常に冷酷で厳しい条件を突き付けているのである。

それは、次期宗主である教如筆頭に主戦派であった坊官達の『死』であった。

この条件に主戦派は怒り狂ったのである。

彼らは断固徹底抗戦を叫び、石山の要塞に立てこもり寺内にて華々しく散る覚悟を決めている。

しかし、門跡である顕如や、頼廉、雑賀孫一など現実を知る者たちはこれらの動きを冷ややかに眺めていた。

「このままではあきません。幸いな事に門跡には他にもお子がおられます。」

頼廉は教如に見切りを付け、弟である准如の存在価値を言った。

「そやけどなあ、あれらは押さえがきかんわな。このままやったら本願寺そのままが消されてしまう。意地は通したんやけど、どうもそこらの線引きが分からんのやるな。」

顕如はまさか信長が次期門跡の命まで欲するとは思わなかった。

信長の思慮や行動が怒りにまかせて動いていた頃とは明らかに変わっていた、まさか信長の『虫歯』が抜けたので、癩癩が収まったなどとはだれも想像できない。

それゆえに、信長の怒りの大きさは激しかったのである。何より門徒を使い各地で騒乱を起こして日本の本を混乱させた報いは受けさせなければならぬ。

それには一宗派として分をもつてのみ存在を許す以外は無かった。

幼いころより本願寺浄土真宗門徒の力を見てきた教如には織田軍なくその気持ちが強い。

実際現状においても各地の門徒達が立ち上げれば負ける事など端から考えの内にはない。

つい今しがたも教如の右腕である、粟津 右近が鉄砲隊を率い、織田軍に撃ちかけて戻ってきた。

「門跡様も織田を過大評価しすぎておる。この石山に籠れば、どれだけ大筒を撃ちかけてこようと、返り討ちにしてくれるわ！」
教如はたった今織田軍を一当てしてきた粟津 右近に興奮した様子で早口でまくしたてる。

「教如様、戦は兵の強きも大事ですが、人間は食わな生きてられませぬ。石山の補給も止められて、門徒達は飢えてます。」右近はこの御曹司が末端の門徒の心情など理解出来ない事を当然理解している。

が、現実には本願寺上層部は飢える事はない。
飢える事を知らない御曹司はその怖さなぞ理解できない。

「そろそろ信長さんも堪忍袋の限界やろか……。」
意味深な顕如のつぶやきを頼廉は聞き逃さなかった。

信長の考え

「坊主ども、根切りにされたいのか？」
信長はぼそりとつぶやく。

そばに控えていたのは、馬回りの将である、名人久太郎こと堀秀政であった。

「宗派も多岐に及びにあたり、拮抗が取れるものと存じ上げますが。

元々一向宗であった堀家の摘流は本願寺が滅ぶのを気の毒と感じたのか、本願寺を擁護した。

これが小姓時代ならとてもではないが信長の前では発言できない言葉であった。

身近にいる分信長の短絡過ぎる苛烈さが治まりを見せているのを彼は感じていたのである。

「ふん、そんな事は分かっておる。面倒な紀伊に押し込めておけばよいし、段落がついたら寺社を京に集めようと考えておる。」
信長はここにきて壮大な構想を口にしたのである。

各宗教の最高指導者を京都に集め、各々に寺領を与えて、宗教都市として、天皇、朝廷と共に精神的な中枢都市としての繁栄を考えていた。

元々の本山はそのまま残して、武力を取り除き、半人質化をし、宗教活動に特化させることで、権益を放棄させる事が目的であった、しかし、信長はその見返りに信者の数だけに見合った保護政策を取るつもりである。

その仕上げというべき『本願寺』との戦いであった。

その後にも、これも強大な神社勢力である『真言宗総本山高野山』が手つかずで残っているのである。

「紀伊は、雑賀衆、根来衆、粉河衆、高野衆……厄介な勢力が固まりますな。」

当時の紀州、紀伊国は戦国大名が現れない特異な地域であった。

和歌山港は紀伊水道から瀬戸内海へ抜ける要所でもあり、大型船が入りにくい大阪湾に入る船は一度和歌山港で荷物を小船に移し、運び直すのであった。

それにより海賊などより身を守る術を持たなければならなかった、そこに武装集団『雑賀衆』が生まれる原因があった。

そして紀ノ川が流れる下流地域には肥沃な土地が広がる。

ここが雑賀衆の本拠地である雑賀荘（現在の和歌山市）をはじめ、紀ノ川北岸の十ヶ郷、宮郷、中郷、南郷の五つの荘が形成した雑賀五搦が人口約8万を擁し、その人口の10%に当たる8千丁もの鉄砲を保有していたとされる。（これは同じく鉄砲衆を主力とした根来寺、粉河寺を除く数である）

「そうよ、紀伊国の扱い、誤ると怪我をする。」

信長自身、彼らを常に雇っていた経験もあり、その戦闘力の高さはその事実が物語る。

「しかし雑賀衆も割れている様子、そこが又難儀でございますな。」

現在雑賀荘の約半数は本願寺についていた、又根来衆は信長について本願寺を包囲している。

信長の構想では、雑賀衆、根来衆、粉河衆の熟練の鉄砲手はこれからも手ゴマとして扱いたい、先ほどの京都宗教都市構想にも当然彼らを組み込むが、特別に配慮を与えるつもりである。

それにしても宗教などは特に実体がないだけに、物事は厄介である。これらが相いれない事も信長はすでに理解していたし、これからも宗教をめぐる争いは無くならないというのが彼の出した結論であった。

であるならそれらを同じ箱の中に詰めてしまおう。

信長自身が監視できる体制を作れば問題ないと考えていたのである。

最終的に、権威機関、軍事機関、宗教機関、政治機関、商業機関を完全に別離するという構想が信長の頭の中に出上がったのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0557m/>

新信長伝 短気は損気

2010年11月21日21時55分発行